

野 菜

実 況…(28年2月20日現在)

1 施設野菜

果菜類

(1) 大玉トマト

福井地区は、1月27日から購入苗での育苗が開始されている。南越地区では1月末から接ぎ木が行われており本葉4～5枚になっている。若狭地区では、1月上旬定植が1段花房開花盛期となっている。

(2) ミディトマト

若狭地区の促成長期どりは、21～22段果房が開花中で着果も良好で15～16段果房を収穫中となっている。葉かび病、うどんこ病が小発である。

坂井地区では、2月12日からプラグ苗による育苗が開始されている。3月9日頃から鉢苗による定植開始の予定である。

(3) スイカ

坂井北部丘陵地は、平年同様2月5日から播種が開始され、2月22日から接ぎ木が行われている。低温の影響で発芽揃いがやや遅い。

(4) メロン

坂井北部丘陵地の播種開始日は、プリンスメロンが2月5日から、2月25日には接ぎ木作業を行う予定である。マルセイユメロンの播種日は2月20日から、アールスメロンでは早いところで2月22日から播種開始となっている。

(5) イチゴ (高設)

各地区で収穫が行われており、生育の早いところで2～3番果房が収穫中となっている。遅いところでは1番果房が収穫となっており2～3番果房が開花～肥大中となっている。

ハダニ類が少～局中発、アブラムシ類が中発、灰色かび病が少発、うどんこ病が微発である。

葉菜類

(1) 軟弱野菜

福井地区のハウレンソウは11月20日播種が80～90日で収穫中である。

べと病が少発である。

根菜類

(1) カブ

三里浜砂丘地は、暖冬の影響で生育肥大が早く2月出荷用が1月に収穫されている。

2 露地野菜

果菜類

(1) 一寸ソラマメ

若狭地区は、分枝数6～8本、分枝長20～30cm、葉数8枚になっている。坂井地区では、分枝数5～6本、分枝長20～30cmになっている。平年よりも生育は進んでいる。

葉菜類

(1) キャベツ

春どりは、坂井北部丘陵地で10月下旬定植が生葉数12枚、11月上旬定植が生葉数9枚になっている。

(2) ブロッコリー

初夏どりの播種は、南越地区では2月10日から開始され育苗中となっている。

(3) ツケナ類

奥越地区の勝山水菜は、早いところで1月下旬から収穫開始となっており、2月3日からは福井市場に出荷されている。

(4) ネギ

福井地区は今年の5月上旬定植が一部継続出荷されている。秋冬どりの播種育苗が、若狭地区で1月上旬から、福井地区は1月中旬から、奥越地区で1月下旬から、坂井地区では2月初旬から順次が行われている。越冬春どりは、福井地区で草丈70～90cm、茎径22～25cmになっている。

(5) タマネギ

福井地区は草丈30cm、生葉数2.5枚となっている。坂井地区では生育の早いもので草丈23cm、生葉数が3～4枚となっている。

(6) ニンニク

福井地区は草丈40cm、生葉数3枚となっている。

根菜類

(1) ニンジン

三里浜砂丘地は、年明け後も継続出荷している。

対策

3月は、気温の日格差が大きく、ハウスやトンネル内の温度変化も大きくなるので、日中は高温による苗の萎れや葉焼け等の発生防止に努めるとともに、夜間は夜温の確保のため保温管理を徹底する。そのため、必ず最高最低温度計の設置を行い、常に温度変化を注視しながら適正な温度になるようにハウス内管理に努める。また、越冬野菜については追肥時期が遅れないように留意する。

1 施設野菜

果菜類

(1) 育苗後半の管理

ア 充実した苗に仕上げるため、早めに株間を広げて苗の徒長を防止する。また、晴天日には苗床のトンネルを早めに開放する。

イ 定植の1週間程度前からは苗床の温度を下げ、過剰なかん水を控えて、定植後の環境条件に耐えられるよう苗の馴らしを行う。なお、急激な低温に遭ったり、極端な温度変化等で苗が萎れたりすると、奇形果や雌花の着生不良、生育遅延の原因になるので、最低夜温の目安はメロン、スイカで約15℃、キュウリでは約13℃、トマトで約12℃以上を確保する。

(2) 圃場の定植準備（地温の確保）

ア 有機物施用および施肥は、遅くとも定植10日前までには完了する。また、内張カーテン・トンネル・マルチ等の保温資材の設置は、定植1週間前までには完了させ、定植時に地温が十分確保できるように努める。

イ 圃場が乾燥している場合は、定植2～3日前にかん水を行い定植までに地温を回復させる。

ウ 定植苗をスムーズに活着させ初期生育を促すには定植時の最低地温の確保が不可欠である。活着に必要な最低地温は、トマト、プリンスメロンで15～16℃、スイカで16～18℃、キュウリ、メロン(自根)では18℃を確保する。

(3) 定植

ア トマトは1段果房1花開花時、キュウリ、メロン、スイカでは本葉3～5葉期が定植適期である。なお、セル成型苗を直接定植する場合は、根の発育がよくなりすぎて吸肥力が強くなる傾向がある。このことから、初期生育が旺盛で過繁茂になると生長点異常や心止まり、尻腐れ果、空どう果、乱形果の発生原因になるので留意する。

イ 定植は天候の良い日の午前中に行い、ハウスの温度が下がり始めるまでにトンネルを被覆して保温を行う。

ウ 低温日に無理して早く定植しても活着が悪く生育が遅れ、場合によっては植え直しとなることもあるので、天候の悪い日の定植は避け天候の回復を待って行う。

エ 植付け時のかん水は、鉢土と周囲の土が馴染む程度に手かん水で行い、過剰かん水による地温低下を避ける。低温時は、できれば20℃前後の温水でかん水し活着を促進させる。

(4) 生育期の管理

ア トマト

(ア) 生育初期に低温に遭遇すると中段果の乱形果や低段果のケロイド症果等の被害果発生原因となるため、低温時や夜間の保温管理を徹底する。

(イ) 生育促進の目安として、気温は午前中25～28℃、午後20～25℃、最低夜温12～13℃程度を目標に管理する。また、かん水は必要最小量とし、地温低下防止と根の発達を促進する。

イ キュウリ、メロン、スイカ

(ア) 活着期は、午前中28℃、午後25℃、夜間14℃程度を目標に管理する。なお、無加温栽培では、夜温を確保するため午後20℃を下回るようになったら早期にハウスを閉め、トンネルを被覆して保温に努める。

(イ) 特にメロンでは、定植直後に目標着果節の花芽が分化するので温度管理や定植苗の萎れに注意する。

ウ イチゴ

(ア) 3月以降の温度管理について、夜温を上げすぎると徒長や果実の品質低下の原因になりやすい。日中の温度は20～23℃、夜温は8℃以上を基本とし、日中の温度が25℃前後になるころからハウスサイドを全開にして喚気する。

(イ) 灰色かび病は多湿条件下で発生しやすいので施設内の喚気に努め、枯葉や古葉をきれいに取り除き早期防除に努める。併せて、うどんこ病やハダニの防除も行う。

葉菜類

(1) 軟弱野菜

- ア 収穫期に近づいたハウレンソウやコマツナ等は、気温の上昇とともに急激に葉が伸び始めるので、収穫遅れにならないよう、計画的に収穫作業を行う。
- イ ハウレンソウはべと病予防のため、かん水を控えてハウス内が過湿になるのを避けるとともに、予防散布に努める。

2 露地野菜

果菜類

(1) 春果菜類全般

- ア 圃場準備として、圃場内の排水対策等は晴天の日を見計らって早めに施工する。
- イ 有機物の施用は、定植の1か月前までに行い耕起して土と馴染ませる。
施肥は定植10～14日前までに行い、必要に応じてトンネル・マルチを設置して地温を高める。
- ウ 定植予定の2～3日前に十分にかん水をして、定植時には地温を回復させる。

(2) イチゴ

枯れた葉や古葉をきれいに取り除いて病害発生を防ぐ。

(3) 一寸ソラマメ

- ア 親茎を切り取り、太い茎を6～8本残して、早めに追肥を行う。
- イ 不織布等のトンネルは、茎がトンネルにつかえるようになったら除去する。
- ウ 開花期に発生する茎は早めに除去する。

根菜類

(1) ダイコン

- ア 3月中～4月中旬が播種時期となる。圃場準備の際に土を練らないようする。
- イ 12～13℃以下の低温に遭遇すると花芽分化(抽苔)が誘起されるので、播種期が早いほど晩抽性の高い品種を用いる。3月中の播種はトンネル+マルチ+べたがけ、4月上旬播種はトンネル+マルチ等を用いて保温管理を徹底する。
- ウ 発芽揃いを良好にするため、マルチ等は早めにしておき、地温の上昇を図る。
- エ 好天が続くことが予想される日を選んで播種し、畝毎にトンネル被覆をして、早めに保温を開始する。
- オ 生育前半は葉焼けが発生しない程度に保温に努め、生育を促進するとともに、抽苔を抑制する。

(2) ニンニク、タマネギ、ラッキョウ

4月中旬頃からの球肥大が開始するまでに十分な生育量を確保するため、越冬後早めに追肥を行う。また、雑草が発芽する前に除草剤散布を行う。

葉菜類

(1) 秋まきキャベツ

結球までに行えるだけ生育を進めるため、越冬後早めに追肥、中耕を行う。

(2) 越冬ネギ

生育を進めるため、越冬後早めに追肥、必要に応じて土寄せを行う。